

定義しようとする、結構難しいものが存在します。事実とは何か、というのもそんな概念のひとつです。しかも自然科学の世界における事実と、社会科学の世界における事実とは、必ずしも同じ概念でない可能性すらあるのです。これが話をややこしくしています。

「理論」と「現実社会の実態」との整合性を調べる方法は、大きく分けて二つあります。特定の理論が、現実社会の実態と合致するかどうかを調べる「**演繹法**」と、逆に現実社会の実態を計測し、データ化したものからそれらを矛盾なく華麗に説明しうる理論を構築する「**帰納法**」の二つです(図1・1)。ロジャー・ニュートンが(そしてほとんどの科学者が)一義的により正しい方法論と考えるのは、この二つのプロセスのうち前者の演繹法です(ここで言うところの「演繹法」は、論理学者が「仮説演繹法」と呼ぶものを意味します。仮説演繹法は、広い意味での帰納法に含まれるとする考え方もありますが、ここでは図1.1のような異なるアプローチと考えることにします)。帰納法の場合、データにあわせた理論(無矛盾の仮説)を探すプロセスとなるわけで、そこに「ないものが見えてしまう」可能性が生じるのだと言います。このようなあと付けの理論化を専門家は、「**ポストホック**」(もしくは「**アドホック**»)な理論化と呼んでいます。

演繹法 (deduction)

帰納法 (induction)

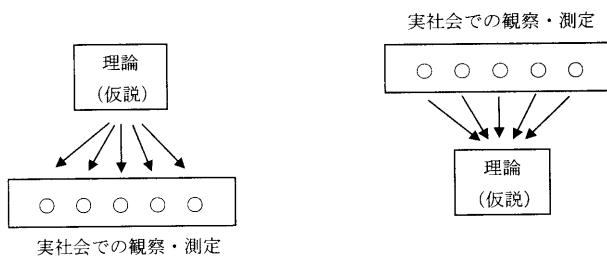


図1-1 演繹法と帰納法——理論(仮説)検証の二つのアプローチ

社会科学の世界における専門用語

マイクル・シャーマー(一九九九)が過去の定義(ピーター・メダワー、一九六九/アーサー・スタンリー・エディントン、一九二八など)をうまく要約しておりますので、それを拝借することにしました。

「仮説」…観察結果に対する追試可能な説明。

「理論」…基盤がしっかりしていて、よく吟味された仮説、もしくは仮説群。

「帰納」…現存するデータから、一般的な結論を導き出すことによって、仮説を組み立てる。

「演繹」…仮説にもとづいて特定の予測をたてる。

「観察」…探すべきものを示す仮説に従い、データを収集する。

「検証」…初期仮説の追認、あるいはその誤りを正すために、さらに観察を重ね、予測と対照して分析を行う。

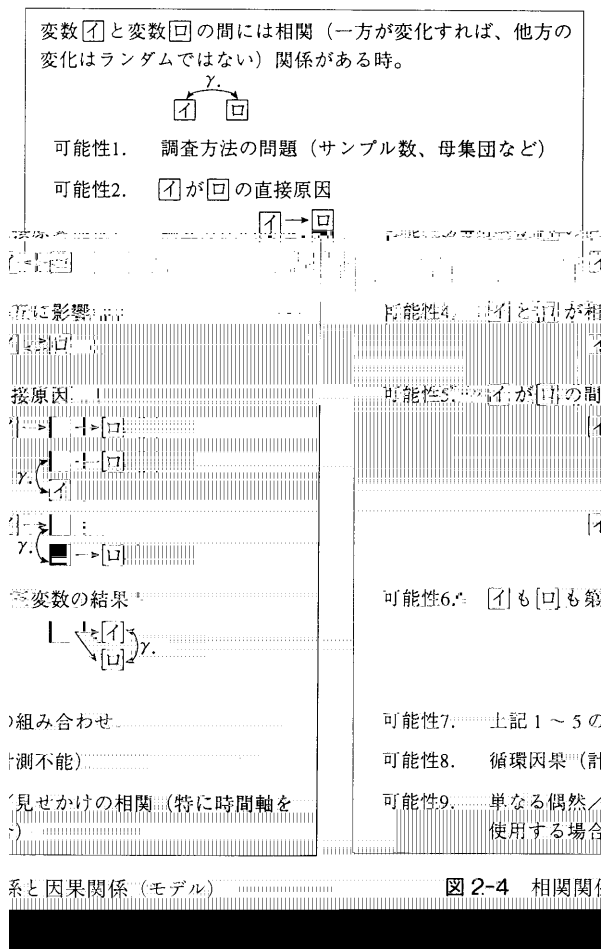
「事実」…一時的な同意が得られる程度には論理的であると認められた結論。

(参考…マイクル・シャーマー、一九九九。四〇―四一頁)

ひとことで言うるとすれば、**社会科学界における事実とは「蓋然性（確実性）の世界」**です。自然科学のように完全な白か黒か、という事実ではなくて基本的に灰色であり、その灰色が限りなく白に近いものか、黒に近いものか、というものでしかありません。

NHKはテレビのある家庭から、視聴料を徴収しているので定期的な収入がありますが、他の民放や新聞、雑誌などは自分で稼がなくてはなりません。収入の主要部分を占める広告も、その放送番組や記事などが多数の人の目に触れるという前提で成立しています。つまり売れなくては悪循環に陥るため、売るためには少々下品なマネもしようという出版社が出てくるのは必然です。エラソーに政治批判をした次のページで、袋とジヌードを出したり、アナウンサーの胸の大きさを比べたりしても、自己矛盾は感じないように編集人の人格ができあがっているわけです。**マスコミは、売れる見出しを作るためには魂でも売ります。**これをまず知っておいてほしいと思います。

「(統計学上有意な) 相関関係が存在する」ことば、**因果関係の前提**です。つまり有意な相関関係は、因果関係があることの必要条件となります。逆に言えば、相関関係がある、というだけでは、因果関係についてはまだ何も言えません。



現在はネット上にかなりの情報が存在

しますが、こうした付録の参考文献には、通常の検索で知りえない情報が載っていることがよくあるのです。その中には、読みたいと思っても決して手に入らないものもありますが、多くの場合、本人や本人の所属する研究機関を通じて入手できるものです。そしてこれが重要なことなのですが、ネットでは入手できない情報の中に、真に必要なモノが存在することがよくあるのです。

質問票を集め終わったら、今度はそれを見やすい表の形にまとめることになります。その段階で無回答（空自）や、一つだけ選ぶべきものに二つ以上の回答が選択されているもの、明らかなまちがいやウソなどを見つけ出し、場合によって（その人のデータ全部を）破棄したり補修したりする作業がありますが、それを「クリーニング」と呼んでいます。

いしいひさいち氏の漫画 G、犯罪者の何%かが「心神喪失」とか「心神耗弱（心神喪失よりはやや症状が軽い）」という概念で無罪になったり、罪が軽くなったりする風潮をからかったものでしょう。実はこの冗談、私のような犯罪学者・刑事法学者には笑えない、と言うよりかなり身につまされるものでして、内心忸怩たるものがないわけではありません。

集めてもオペレーションがダメならやはりゴミが出ます。ましてやマスコミの調査のかなりの数は、正しいやり方で集めていないかもしれないのです。

これは私の個人的趣味の問題ですが、どうしても紹介したい4コマ漫画の大傑作（漫画I、言わずと知れた、いしいひさいち作品）があります。

この漫画には解説は余計かもしれませんが。論議をわざと複雑に（かつ、わからなく）している忍者と侍。それに対し意見を求められた殿様は、わけもわからず「ガッツだ」と応えます（というより、それ以外に応えようがなかったのでしょう）。しかし、いしいひさいちが揶揄しているのは、殿様（つまり、血筋が良いという理由だけで、無能にも拘わらず高い地位にいる人々）よりむしろ、侍と忍者（威圧的なレトリックで話をややこしくする人々、もしくは自分の立場のみを強弁する人々）の方だと思えます。博学のふりをし、ある種の主張を声高に繰り返す人々は、今もむかしもいっぱいおられますね。それにしても侍と忍者がこのように壁の上で議論をする図というのは、なんと言うべきでしょうか、発想が奇抜です。4コマめ、勝ち誇ったような態度を見せる忍者と、議論が膠着した状況で権威者に味方を求める侍、そして何も考えていなかった殿様の、三者三様の姿が印象的な作品となっています。



漫画①

選択肢を作る時の基本思想は以上ですが、気をつける点は、まだあります。まず、選択肢は中立的で公平でなくてはならず、誘導的な選択肢は、良くない質問とされます。

自衛隊をイラクに派兵する可否が問題となっていた二〇〇一年八月、NHKが行った派兵への賛否を問う質問の選択肢は次の三つでした。

「1 派遣すべきだ」、「2 安全確保のため慎重に準備をしてから派遣すべきだ」、「3 派遣すべきでない」（二〇〇一年八月十二日の七時のNHKニュースより）。これら三つの選択肢は、先ほどの基本思想のうち三番目の「相互に排他的」という項目に違反（つまり、派遣に賛成の人は、1も2も答えられる）していますし、四番目の「全部の選択肢で全体をカバーしている」という項目にも違反（つまり、意見のない、わからない人は、どれも選べない）していますが、より重要なこととして、「誘導的」なのです。

最初の「1 派遣すべきだ」と考える人でも、可能なら「安全確保のため慎重に準備をしてから」にすべきと考えるのは、まあ、普通だと考えます。つまり、言わずもがなの「安全確保……」云々を加えた質問を作って、賛成派を二つに分けただけの結果になっています。NHKはなぜこんなおかしい選択肢を用意したのか？ それはわかりませんが、**たぶん派遣に反対する回答が一番多い状況にしたかったから**ではないかと思います。これはコマーシャルでよく使われるテクニックのひとつで、**一番多くなりそうな選択肢を二つに分割し、特定メーカーの製品を「トップの回答」だったと発表する手法**。「フォースト・チョイス (forced choice)」と呼ばれるテクニックの変形です。

前の質問が与える影響

質問文の言葉の順序をどう決めるべきか、という明確な指針はありません。なるべくひとつのことについてのみ尋ねるよう（可能なら）工夫するのがよいでしょう。

順序についてもうひとつ、質問自体の並び方（つまり複数個の質問をどう並べるか）によっても回答内容は変化することが知られています。たとえば、自衛隊の救助活動や平和維持活動に関する質問を並べたあとで、自衛隊自体の賛否を尋ねると、賛成が増えたりします。このように前の質問が、後の質問に影響を与える効果を「**キャリーオーバー・イフェクト (carry-over effect)**」と呼んでいます。

知 wisdom

痴 stupidity

私は『中央公論』という月刊誌に、「今月の危ない数字」というコラムを書いていたことがあります。二〇〇二年二月に連載がスタートし、三回目の原稿を提出したのは三月頃だったと思います。このコラムは、ちょうどこの本のように、世間で不用意に使われている数字やアンケート調査の結果などを批判的に論評するためのもので、原稿用紙六～七枚（二ページ）の分量でした。その三回目の原稿では、読売新聞がよくアンケートで使用する誘導的選択肢「やむをえない」を批判しました（第四章、一三四～一三五頁を参照のこと）。こんな意味

不明の選択肢はいけませんよ、と。

すぐ編集担当者 K さんから電話がありました。今回の原稿は親会社を批判する内容なので**ボツにして書き直してくれ**とのことでした。中央公論の経営権は、二〇〇一年度より読売新聞社のものとなっております、その悪口を書くのはマズイと判断したようです。

編集担当者ではラチがあかないので、編集長に代わってもらい、こう申し上げました。「中央公論の親会社が読売なのは知っている。しかし私の知っている中央公論は、たとえどんな立場の人であれ、悪いものは悪いと言う勇氣を持っていた。次の号では朝日新聞を批判するつもりだが、まず自分の親会社の非を認めてから他社の非を述べるのが筋だと思う」。そのあと続けてさらに「どうしても書き換えよというなら書き換えるが、連載はやめさせてもらう」と主張しました。

結局、連載が三回で終了してしまったことで、編集長の決断はおわかりいただけると思います。しかし日本社会でこの編集長を嗤うことは、実は難しいことなのです。特にナペソネという独善的カリスマリーダーがいた読売という組織において、子会社で責任ある立場にある人間の心理的プレッシャーは、かなりのものなのでしょう。このかわいそうな編集長のように、上と下の板ばさみで身動きのとれない中間管理職者は山ほどいます。そして残念な話ですが、それに埋もれる人はそこまでの人生なのだと言えません。